宇都宮大学教育学部附属特別支援学校

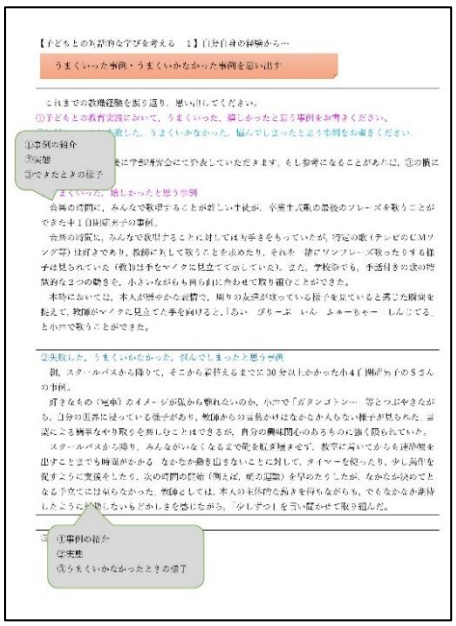
対話性を重視した学びに基づく教育実践の創造
―対話性の概念の検討と校内研修―

Ⅰ　目的

知的障害特別支援学校における授業作りに関して,「対話性」という観点から検討を加えた。まず,「対話性」という観点について整理し,「相互主体的に，自分の考えを表現したり他者の考えを受け止めたりする中で，新たな認識を柔軟につくり出す態度や性質」と定義した。さらに，対話性を重視した学びでは，子どもが自らの思いや願いをもち，発信していくことが学びの前提にあることから，子どもの内面を捉える視点について校内研修を重ねた。

Ⅱ　校内研修（1）

子どもの思いや行動を見つめる―教職経験におけるうまくいった事例と難しかった事例より―


【子どもとの実践的な学びを考える　1】自分自身の経験から…

うまくいった事例・うまくいかなかった事例を思い出す

これまでの教職経験を振り返り，思い出してください。

①子どもとの教育実践において，うまくいった，楽しかったと思う事例をお書きください。

②失敗した，うまくいかなかった，悩んでしまったと思う事例を書きください。

①事例の紹介
②実態
③やりたとその様子

まくいった，楽しかったと思う事例

合唱の時間に，みんなで歌唱することが難しい生徒が，卒業生式典の最後のフレーズを歌うことができた。1日目保護者の事例。

合唱の時間に，みんなで歌唱することに対しては力弱さをもっていたが，好近の歌（テレビのCMソング等）は好きであり，教師にして歌うことを求めたり，それを一緒にワンフレーズ歌ったりする様子は見られていた（教師は手をマイクに見立てて示していた）。また，学校祭でも，手話付きの歌の特徴的な2つの動きを，小さいながらも同時に合わせて取り組むことができた。

本時においては，本人が穏やかな雰囲気で，周りの友達が歌っている様子を見ていると楽しそうな様子で，教師がマイクに見立てた手を向けると，「あい　ぶりーず　いん　ふぁーもぁー　しんじてる」と小声で歌うことができた。

②失敗した，うまくいかなかった，悩んでしまったと思う事例

例，スタールバスから降りて，そこから着替えるまでに30分以上かかった小4（聞き取り子のSさんの事例。

着替えるもの（道具）のイメージが頭から離れないのか，小声で「ガタンゴトン…　等とつぶやきながら，自分の世界に浸っている様子があり，教師からの言葉かけはなかなか入らない様子が見られた。言葉による指示ややり取りを楽しむことはできるが，自分の興味関心のあるものに強く関心を示していた。

スタールバスから降り，みんながいなくなるまで靴を履き替えず，教室に戻ってからも着替えを出すことまでも時間がかかる　なかなか動き出さないことに対して，タイマーを使ったり，少し高学年の様子に変換をしたり，次の時間の提示（例えば，朝の活動）を早めたりしたが，なかなか決めてとなる手立ては見られなかった。教師としては，本人の主体性を待ちながらも，できなかなか待ちきれないもどかしさを感じながら，「少しずつ」を言い聞かせて取り組んだ。

①事例の紹介
②実態
③うまくいかなかったときの様子

各々の教職経験を振り返りながら,子どもの思いにどのように向き合ってきたのかを伝え合うことで,対話性を重視した学びについて考える糸口となるよう企画した。

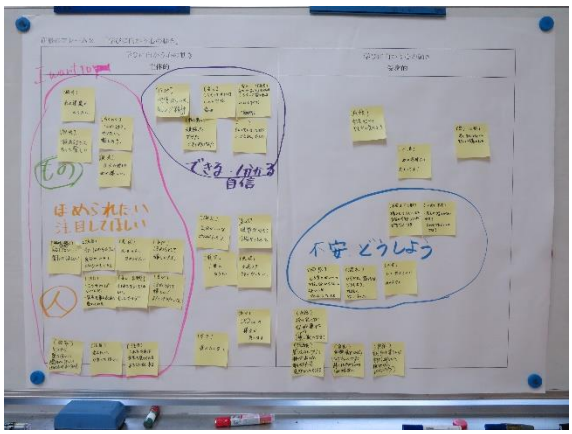
○うまくいった事例の一例
- 望ましくない行動が多く，授業にのることができなかった生徒に対して，教員間で共通理解を図り対応したことで，徐々に減った。
- 「ください」の要求言語が出てくるようになった。
- はじめは学校に行きたくないと言っていたが，生徒との交渉がうまくいき，苦手なことにも挑戦できるようになった。

○難しかった事例の一例
- 初めは親しかったものの，徐々に暴言が目立つようになった。
- 本人の考えていることが分からず，対応が追いつかない。
- 保護者の要望もあり難易度の高い問題に取り組んだところ，意欲が低下した。

Ⅲ　校内研修（2）

学部ごとに児童生徒の思いや行動を見つめる

子どもから発信された思いに気づき，子どもの視点に立ちながら思いを捉え，どのように授業改善に生かしていくのか。また，一人一人の思いを概観し，学部の児童生徒にはどこに良さがあり，どこに課題があるのかを考えるために企画した。校内研修（1）の書式で一人一人を見つめた上で，そこにある思いを考えた。



小学部児童について

中学部生徒について

高等部生徒について

研修の様子

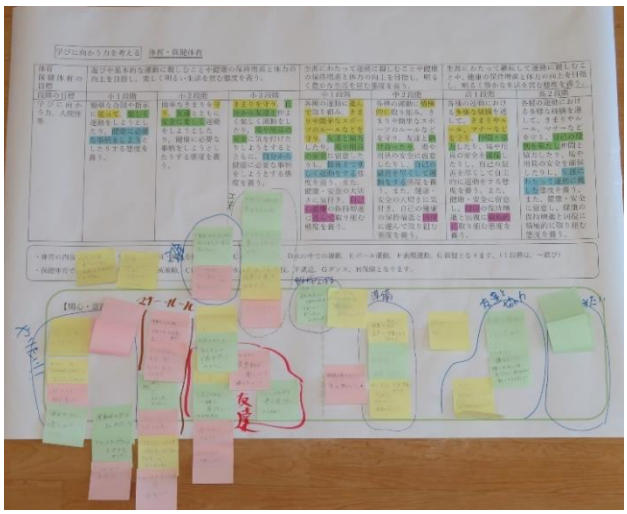
Ⅳ　校内研修（3）

学びに向かう力から見る子どもの思い

授業を方向付ける土台の部分が「学びに向かう力・人間性等」である。学習指導要領に示された段階や文言を改めて見直し，各々の考えや思いを伝え合う中で，新たな気付きを得ながら共通理解を図るために企画した。

本研修は，小中高の学部教員６名程度で構成したグループで討議をした。学部間のつながり，学部ごとの違いを意識しながら，特定の教科を基にして「学びに向かう力・人間性等」について検討した。

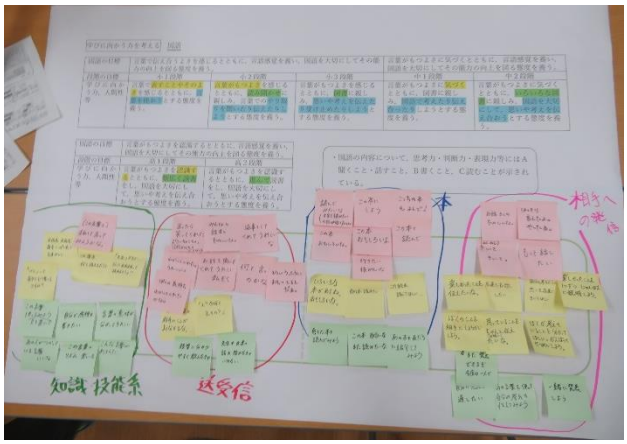
※付箋の色：ピンク（小），薄黄（中），緑（高）



【体育・保健体育のグループ】

友達に関する記述（小学部２段階にある「友達とともに」から高等部２段階の「自己の役割を果たし仲間と協力したり」までの段階）を確認した。

小学部段階では「競争すると楽しい」といった楽しさが前提にあり，中学部から高等部にかけては「〇〇さんを目標にする」「一緒にがんばろう」「私も準備をしないと」「勝ちたいから，友達と協力して動きを確認しよう」などと状況に応じた多様な思いにつながるのではないかと話し合った。自らの所属する学部だけでなく，学部間のつながりを意識した討議は，異なる知識や捉え方を交換する場として有効であった。



【国語のグループ】

各段階に含まれる要素を抽出し，そこに含まれる記述から思いを考えた。例えば，「言葉で表す」「やり取りをする」「思いや考えを伝えたり受け止めたりする」といった要素を「送受信」とくくり，その中の思いを考えた。小学部段階では，「話すと楽しいな」「分かってくれてうれしいな」という安心感をもって関わり合う様子が大切であり，高等部になってくると「後輩に分かりやすく教えないと」というように自らの考えを整理して，相手に伝えやすくまとめる力への意識が必要になってくることが感じられた。